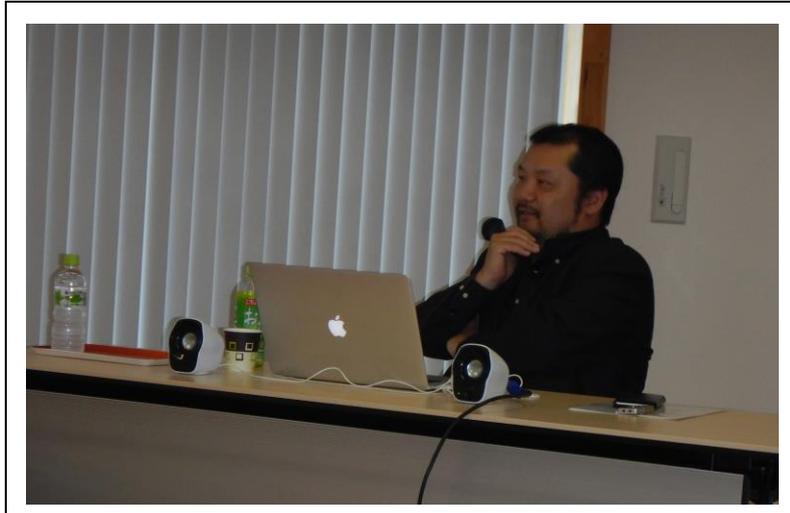


第37回 新しい観光の形と名田庄の潜在的魅力

木川 剛志
(和歌山大学観光学部准教授)
平成29年6月17日



新しい観光の形と名田庄の潜在的魅力

早川 みなさま、こんにちは。時間になりましたので、たぐいまより第37回名田庄多聞の会を開催いたします。本日はようこそお越し下さいました。今日の講師は和歌山大学観光学部准教授の木川剛志さんです。そこにありますように「新しい観光の形と名田庄の潜在的魅力」というテーマでお話を伺います。それでは、木川様、よろしくお願い致します。

自己紹介と今日の話

木川 ご紹介頂きました木川です。和歌山大学観光学部と書いてありますが、国立大学で観光学部を持つているのは和歌山大学だけです。和歌山の観光だけでなくそれぞれの教員が全国至る所に行き、観光についていろいろ関わっています。観光という言葉は昔から使われている言葉なので、昔ながらに理解されるのがほとんどですが、観光という言葉の意味自体が変わってきています。どういうことが観光でそれが地方とどういう関わりを持っているかお話ししたいと思っています。今は和歌山大学になっていますが、3年前まで福井工業大学に9年間勤めていましたので、福井はぼくにとって近い場所です。

今日の内容ですが、一番初めに自己紹介をして次に観光学とは何なんでしょうと。なぜ、今観光に注目されているかといえば、間違いなく大きな影響はインバウンドなのです。バウンドとはどちらかに向くという意

味です。インはうちですから、外からこちらに入ってくる人、日本にやってくる外国人観光客という意味で使われています。昔は日本人が海外に行く海外旅行が多かったのですが、いまは入ってくる人、インバウンドのほうが増えて来ました。このインバウンドがあるから日本は観光業に力をいれているのです。いままでの皆さまの知っている観光とこれからの観光の違いを説明して、最後に事例を紹介してみなさまの話合いの話題提供にしたいと思います。

国立大学で観光学があるのはうちだけと言いましたが、わたしいま40歳ですが、大学で観光を勉強した人というのはまずいません。だから、みんなバックグラウンドは違いますが、ぼくは京都生まれで建築をやっていました。大学を出たあと、スリランカで建築家として働いて、そこからアジアに興味を持ってスリランカや中国の大連で建築家の修行をして日本に帰ってきました。まちづくりに関与していて、その流れで観光学部に雇われたというわけです。まちづくりと観光学、ちよつと分らないかも知れませんが、ぼくらの中では、「まちづくり、ああ、あれ、観光学だね」というのです。

まちづくりと映画、落語

福井では何をしていたかというのと、まちづくりと映画を絡めながら福井市でいろんな活動をしていました。どこが繋がるの、という感じになるかも知れませんが、あとでおいおい説明しますが、短編映画をいくつか

撮っていました。30分以下の映画を短編映画と言います。数年前、こちらのホールで「語らずの町で」というのを上映させてもらいましたが、ここに写っている津田寛治に監督をしてくださいとお願いをした作った映画です。津田寛治が芸能界の先輩の渡辺哲を呼んで映画を作った。こういう映画をいろんな映画祭にかけて福井の映画を日本中の人に見てもらおうというようなことをやりました。

これは映画の話でしたが、ぼくはまちづくりを落語と絡ませて福井で活動していました。まちづくりと落語はどう関連するのかというのと、ご存じですか、福井駅前「きたまえ亭」というのがあったのですが、週に一回上方から落語家を呼んでプロとアマチュアが共演する寄席をやっていました。ぼくも出演していたわけですが、これは何のためやっていたかというのと、福井は空襲と地震で2回破壊されている街なのです。そうすると、何が残っているかというのと建物ではなく記憶なのです。その記憶を伝えるとなると、それは問語になり、物語とはなにかというのと、映画だったり落語だったりします。それらはどうやって作るのとなると、上映し上演しなければならぬ。それが短編映画であったり、寄席につながっていく。

研究のこころ

ぼくの研究は都市計画です。何の研究をしているかというのと、日本の統治時代の海外都市の研究です。朝鮮半島にありました京城(いまのソ

ウル)、それは当時の日本人が設計したのですが、それと現地の現状とはどうであったのか。台湾では台北(タイペイ)がどういう形で生まれてどういう形で発展していったか、それらを時代ごとに分析しています。そのほか、この近くでぼくが入れ込んである町がありまして写真をお見せします。

この写真を見てどこか分かりますか。

(会場から、敦賀?)

敦賀です。どうですか、今の敦賀と違うところがありますか。この写真は1948年のものです。中心街は空襲で一回焼けていますので、焼けたところは掘っ立て小屋が建っていて、焼け残ったコンクリートなどの建物を見られます。残ってはいませんが、町が一度消えたということはおぼくにとつてはとってもショックなことです。消えたのがもう一度再生して行く、それはどういうメカニズムで元に戻っていくのだろうと。その時に何か無理があったのか、あるいは無理はなかったのか。そういうことがぼくの対象でいろんな町を研究しています。

敦賀はまたいまでは日本で一番大きなシャツター街でないかとぼくは思っています、いろいろ回りましたが。なぜシャツター通りが起こっているか。まず、シャツター通りを作りましょうと思つて作ることはあり得ないですね。そうなる前に商店街を作つてそれがシャツター通りになるので、もともとシャツター通りはないわけで、どういふことかというところ、日本で一番大きなシャツター通りが生まれるということは、その前に日本で一番大きな商店街があつたということ。

それはなぜかというところ、戦前の歴史に戻りますが、敦賀は当時国際港として最も重要な港のひとつだった。そのころヨーロッパで発行される地図で日本で地名の載っているのは東京と敦賀だけだったのです。それくらい重要な町です。

この図を見て欲しいのですが、17日で東京からロンドンに行く道筋を示していますが、船で南回りだと30日くらいかかっています。それが東京から直行電車で敦賀まで行き、ウラジオストクに渡り、シベリア鉄道に乗れば17日で到着する。福井の駅にもロンドンまでいくらと書いてあつたということです。

そういう重要な敦賀が戦後どうなつていったかというところ、始めは国際港としての位置付けが、空襲などもなくなりなつていった。その後一番始めにやつたことは石炭の水揚げ港でした。しかし、みなさまもご存じのように、エネルギー革命などで石炭から石油に変わつていき、国内の炭鉱がだめになつていき、敦賀の石炭水揚げ港としての位置がだんだん低下していく。その時何を選んだかというところ、原子力発電所を選んだ。3・11の前は、空前の好景気でした。駅前にどんな新しいホテルが建つた。そういう時期でした。すごい勢いだったのですが、敦賀の原発が止まる、ホテルは予想していたほど埋まらない、シャツター通りになつていく。敦賀は、日本の中で最も国際的な事件や状況に揺れ動かされてきた町だと思えます。

福井工大から和歌山に変わつて最初和歌山県庁に行つて言われたのが「福井ですか、良いですね、福井は原発があるから財政豊かなんでし

よう。敦賀に住んでいたら働かなくてもいいと聞きますが」。そういうふうなイメージがすごくあると思いました。和歌山の場合、原発が来るという話を全て住民運動で止めたという歴史があるので、原発に対する位置付けが違う。何が違うのかというと、ぼくは関西電力で和歌山とか京都とか滋賀県で育ったのですが、電気が来ているな、原子力発電所から、と。それ以上は何もないですね。何十年も前に原発のことで議論のあったところと、3・11以降初めて急に議論を始めた場所の差、この差だと思いました。それは置いといたとしても、福井と和歌山、こんな近いところなのに、原発にこういうイメージをもっているのかと知った時はショックでした。観光とは何かというと、その町をより知ってもらおうということ。そこに住んでいる人たちが何を考えているかを知ってもらうこと、それが観光だと思っております。

観光の内容

観光の内容に入っていくと思います。観光という言葉の語源、みなさまご存じですか。かなり古い言葉です。中国の易経のなかに、「觀国之光 利用賓于王」、書き下し文では、「国の光を観る もつて王に賓たるに利し(よろし)」。これから観光という言葉が出るのですが、どういうことかという、中国がいろんな国に分かれたときに他から人が来ます、そのときにうちの国はこんなにすごいでしょうということ、国力があることを、分かって王様自身がやりやすいようにする、つまり、他か

ら来た人に知ってもらうことによって国のためになる、そういう意味です。それが観光です。

「観光」は英語では何という、これは大きな問題でして、いまはだいたい、ツーリズム(tourism)で表します。サイトシーイング(sightseeing)は、何かを見に来ました、トリップ(trip)は、どこからどこかに移動しました、つまりこれらは旅そのものなのです。観光イコール旅だと普通思っていますが、ぼくらの思っている観光はもう少し違うものを考えていることを理解して欲しいと思います。

観光学には細かい興味の対象がありまして、ひとつひとつ説明するのたいへんなのですが、観光情報学というのがあります。携帯にはGPSデータが内蔵されているので、観光用のアプリをダウンロードすると、その携帯を持つところからどこまで歩いているか全部分かるので、それを測っているのです。どこにどれくらいの人が集まるのか、昼間は、夜はと分かるのです。それでそうすればいいか、などをするのが観光情報学です。いろんな分野があるのはこのスライドを見てもらうと分かります。

最近の動きで観光庁を例にとると、予算を国に申請しますね、何百億とか。今までだと、普通、200億くださいと観光庁がいうと、ここにここを削って150億くらいかな、というのがこれまでの予算の立て方でしたが、いま観光庁が200億で要求すると、もつとやれとさらに追加してくれるのが、今の観光の分野の空気です。

例えば、ぼくら建築の分野でも何かやろうと思つて、そこに「観光」という言葉を付けると予算が通りやすくなる。ぼくが関係している市の

方から聞いたことでは、「観光」というのを付けると何でも通ってしまうので怖くて出せないと言っている。観光はいまそういう勢いですが、この力にはバブル的なものがあるかも知れないけれど、この力を利用してうまくやるのが大事なことかなと思います。

インバウンド

インバウンドというのは「訪日外国人」をいいます。名田庄では外国人が来たなというのをまだ感じないですか。福井県自体も、インバウンド？えつ、外国人それほど来ているの！という感じで捉えています。ぼくはいま和歌山にいますが、和歌山のコンビニに行ったら分かりますが、どこにも大きくシールが貼ってあります。何かというと、「免税店」と書いてあります。外国人がコンビニに行つて何か買うとき、免税の手続きができるようになっています。それくらい外国人が当たり前に来ているのが関西です。和歌山は関空に近いので目に見えるくらい外国人が多くなっています。いま大阪でホテルの予約を取ろうとしても全然とれない。これもインバウンドの影響です。関空に来て一旦大阪に宿泊するからです。それでは、なぜ訪日外国人が増えたのか。京都などでは昔からいるイメージがありますね。福井には来っていないが京都には来ているな、と。そういうイメージをみなさま持たれていると思います。

訪日外国人が増えたのは最近の動きなのです。2003年、これは小泉内閣の時なのですが、その時初めて「ビジットジャパン・キャンペーン」とい

うのを始めた。何かというと、外国の人に日本に来てください、というキャンペーンです。それまで言っていなかったのかというと言っていなかったのですよ。2003年あたりから、日本も経済成長が右肩上がりでなくなってきた、これは観光も大事な産業にしなければならない、となって「ビジットジャパン・キャンペーン」が始まった。日本がそれまで政策として観光をやっていたかという、そんなにやっていなかった。観光庁が国土交通省の外局として出来たのが2008年なのです。まだ10年経っていない。和歌山大学の観光学部は2008年に国策としてできた。

日本に来る外国人観光客がどれくらいになっているかというと、これくらいの右肩上がりなのです。他の産業でこれくらい伸びたのはありません。二回くらい凹んでいます。ひとつはリーマンショックで、もうひとつは3・11。しかし、いまはもう3・11を超えています。2014年で1500万人くらいだったのですが、一昨年の目標が2000万人だったのが、これは軽くクリアしてしまっていて、それ以降2000万人はずっと超えています。日本政府はどれくらいまで見込んでいたかというと、6000万人です。これは世界的に見ると不思議な数字ではないのですよ。6000万人は世界有数の観光国だというほどの数字ではないのです。6000万人は当たり前に来るだろう、という数字です。

いま2000万人と言っていて、オリンピックの頃に4000万人、それが6000万人になったときに、いまの2000万人でパンクしているときにあとどこに行くのですかと。国策として地方に行つてくださいますか、DMOとかいうのがあつて、様々な政策がとられています。

いまは入国外国人が出国日本人を上回りました。出国日本人はこ何年間ほとんど同じですから、これがおおきく変わることはないでしょう。

じゃあ、なぜ来るのかというと、ひとつは格安航空会社(LCC)です。普通の会社はキャンセルなどその後のことなども対応してくれませんが、昨年このLCCで北海道に行ったのですが、帰りの便が天候が悪くて乗れなかった、それで電話して「代わりの便を用意して欲しいのですが」と頼むと、ごく平静な声で「4日後になります」と言われた。自己責任だと。その代わり料金はとても安い。運賃は国内でそれほど差はありませんが、海外の場合は大きい。沖縄からバンコクに行く場合、LCCは5,000円台なのです。関空から台湾だと9000円なにかし、向こうからこつちも同じですから、アジアの方々が日本に来やすくなった。それと東南アジア諸国と日本との経済格差が小さくなっている。海外旅行をする余裕が出てきている。その行き先として日本がある。このような流れが一気に起こっているのがインバウンドです。

観光の新しい概念

まず観光という言葉聞いたとき、どういう絵が頭に浮かびますか。おそらく、ガイドさんがいてみんなどこかに行つて最後に記念写真を撮つて、ああとどこどこ行つてよかったね、というのが観光ですね。観光のチラシもそうですね、どこどこ行くのはいくらで何日かかるとか。メニュー

があつて、パッケージ化されたのが観光のイメージだと思います。こういうのをぼくたち研究者の間では従来型観光といいます。昔からあつた観光ですね。

それではいまの観光はどうなつていのかというと、観光だけが変わつていつていのではないのですよ、社会が変わつていから観光も変わっただけの話なのです。1960年代、その頃は、よく言われたのは大量消費時代である。このころから90年代の半ば頃までよくいわれたのは、一億総中流。60年代、70年代でいわれたのは三種の神器、洗濯機とテレビと冷蔵庫。このとき三種の神器を求めるマインドはどういうマインドだったと思います、いまと比較して？ おそらく、みんなと同じ物を持ちたいということではなかつたでしょうか。他の家にもあるからうちも欲しい。それが一億総中流、みんな同じという意識があつた。

これがどう変化してきたのか追うときには電話を取り上げると分かりやすい。最初、集落に一本電話があるかないか、だった。誰かにかかってくるとその家まで行つて電話に出た。1978年に黒電話の商用試験が始まった。そこから、各家庭にひとつの黒電話になり、1985年にコードレスの電話が出た。娘さんに男の子から電話がかかるとまずそのお父さんが電話に出るが、コードレスなので、それを持つて娘さんは自分の部屋に入つて喋ることができた。ここでプライバシーが登場している。でもお父さんは誰と喋っているかは分かる状態です。1990年代になるとそれが携帯電話になる。誰と喋っているかは分からない。集落全体で一個だったのが家に一個になり、いまは各個人に一個になった。

これがどうなるかというと、温泉でも似たようなことが言えるのです。温泉は今でこそみんな行きますが、昔は湯治だったのです。和歌山には白浜温泉がありますが、あれは何から始まっているかというと、明治以降は傷病兵、怪我をした兵隊が傷を癒やすのが白浜だったのです。始めは、温泉に癒やしを求めていくのではなく、怪我をしたから行く、病気だから直すという時代があつた。それが花柳界と結びついた温泉なり、いまは死語に近くなりましたが、近代になって慰安旅行として温泉に行く。この頃は女性は温泉に行かなかったのです。60年、70年代は、新婚旅行は別ですが、女性が温泉に行くことはあまりなかった。それが変わってきたのが、バブルの時代にグループ旅行といつて会社に働いている女の子たちが友達同士で、4人、5人で温泉に行くようになっていった。いまは、そのグループ旅行でさえあまり温泉に行かなくなった。どうなっていたかというと、現代の傾向は個室温泉です。グループがカプセルになった。携帯電話の流れといつしよ、みんなであつたのが段々小さくなっていった。温泉はいまはカプセルですが、これが先になると一人で温泉に行くようになるかも知れない。いまは個人の時代になって、温泉旅館では100人、200人が入る大広間をどうしようかという時代になっている。

和歌浦はどんどん廃れて廃墟ミアが来るようなことになっている。従来型観光が崩れたのは、お茶の間文化がなくなつたからです。二、三十年前なら、テレビから「お茶の間の皆さま」と声をかけたと思うのですが、いまは家族みんなでテレビを見る文化はなくなりました、各部屋にテレビがある、もしくはスマートフォンで自分の世界に入っていく。そうい

う形になってくると、それぞれが自分の世界を持つ時代になってしまっている。

2000年の初頭では、視聴率が22%など当たり前前の時代があつた。次の日学校に行つて、「あれ見た」というと、「見たよ」と共有できるのが当たり前だった。それがいまはできなくなっている。ぼくが子どもの頃は見たテレビのことを学校に行つて友達に話すのが楽しみだった。その文化はなくなったのです。これは、ぼくよりもっと前の1963年の視聴率の表ですが、NHKの紅白歌合戦は81.4%、プロレス中継が66.7%、行く年来る年が54.7%、ボリショイサーカスが54.3%。このような時代は終わつて個人の時代になった。

これからの観光

じゃー、観光はどう変わっていくのですか、がいまのテーマです。従来型観光はみんなが行つた場所に行つてみたい、です。東京なら東京タワーに行きたい、なぜ行きたいのですかと問うと、みんな行つたからです。これが普通でそれでよかつたのです。受け入れる側も提供するものが分かりやすかつた。ところが、いまは、みんながそれぞれの世界で生きているので、自分でなにか新しいものを発見する、なにかを体験する、になつている。いま、観光に行つて言いたいことは、「おれ、こんなもの見たぞ。おまえ見たことないやろう」。こっちなのです。

それで、現地で新しいこと、珍しいこととなると現地の人でしか分か

らない。昔なら、大阪で名田庄のツアーを考えたとき、大阪の人だけでツアーの企画をすることができた。でも、いまは新しいこと、珍しいものを探すととなると、大阪の人は名田庄のそれを見つけてくることができない。昔なら、大阪で人を集めて名田庄に送り、大阪に連れて帰ってくる。これは出発する側が全て行っているので、発地型観光といえます。それに対して、着地型観光といわれているのは、どういふことかというところ、大阪から名田庄に観光客が来ます、すると名田庄が着地になるから、名田庄の人がこんな面白いものがありますよと提案する。名田庄に来るまでは好きなようにしてきてください、電車でも車でも。現地集合、現地解散、これが着地型観光です。

着地型観光はいまいろんな試みがあります。そのひとつに「ホリデー」というサイトがあります。これはどういうサイトかというところ、一般のひとが各個人でここをこういうふうに戻ったら楽しかったよと、いろんな企画を挙げていく。お出かけプランという形で、それらを見て、行ってみる。以下の話は「ホリデー」のようなサイトがなければうまくいかないよう話ですが、それはなにかというと、和歌山の農家のおちゃんさんが年に13回だけ開店するお店が紹介されるのです。自分の趣味のラーメンを食べるといつて、農家の納屋のようなところを解放する。みんなめっちゃ並ぶらしいのですが、大阪の人はそんなの分かりますか。絶対に分からない。たとえば、名田庄でやるとしても多分全員は知らないと思う。一部のひとだけ知っていると思う。このようなのが可能なのはこんなサイトがあるからです。地域の魅力を外にいかに見せるかが大事なのです。場合によって

はその人が知らない場合もある。

近くの事例を紹介します。隣の小浜です。ここに校区内型地場産業給食というのをやっています。小浜は食育で一生懸命やっていますね、ご存じのように。校区内型地場産業給食というのは、その学校の校区の農家さんが作っている野菜を給食に取り入れるということです。名田庄のみさん、知っていますか。実は小浜の人も知らなかったのです。その様子をいまからビデオで見せしますが、その土地の人も知らないようなことを現地の人に知らせて喜んでもらう、というようなこともあるのです。

（映像が流れる）

どうでしたか、観光学の間人としてはこういうところに行きたくなるのですね。こういう温かい人間関係ができるところに行ってみたい、できないだろうけれど、この給食を食べてみたいと思う。どういう場所だろうと興味を持つ人はいるのですね。昔はこのようなのは観光とは言わなかったのですが、いまは観光です。

地元の人と観光客のことを考えると、地元の人の知っているものと知らないものがあります。地元のひとにも観光客も知っているというのは、誰もが知っていても飽和状態、従来型観光です。観光客は知っているけれど地元の人には知らない、これも従来型観光です。例えば、うみんぴあのホテル、皆さん泊まられてことはないでしょうね、泊まる必要はな

いすから。けれど、観光客は知っているのです。地元の人には知っていて観光客は知らない、これすごく意義があるのです。名田庄の人には当たり前すぎてそれに気づいていないことが多いです、素晴らしいことなのに。ぼくたちはそれを知らないからそこに行けない。さっきのビデオは現地の方も知らなかった、例えば、毎朝その日にとった野菜を洗って学校に届けていた、子どもにおいしいものを食べさせたくてしていたことは、現地の人ももちろん観光客も知らなかった。それを発見したのはプロですね。地元の人には知っているけれど観光客は知らない、これがどれほど重要なことかを、地元のひとが気づくかどうか。ここが一番大きなポイントになります。

事例

福井市の事例を紹介します。福井市は戦災で焼けました。駅前には商店街と郊外型のショッピングモールの対立などあり、駅前には廃れているという言い方をされることが多いのですが、空襲で焼ける前は福井市は文化華やかな場所でした。これは以前福井市にあった演芸場の写真です。加賀屋座といつて、木造三階建ての演芸場があったのです。これだけの人が集まって賑わっていた。一番始めの加賀屋座では歌舞伎の興行が来て何日もやるとそうです。文化にお金を使う場所だったのです。だるま屋は戦前からあった百貨店で、坪川信一というかたが、もともとは先生であった方で、子ども達に夢を与えるということで、お金儲けというよ

り子ども達のために作った百貨店で、だるま屋少女歌劇団というのがあった。宝塚歌劇団を真似て作った歌劇団で、そこに働く女性の職員を集めて演劇をやった。昭和11年、世間が軍的な様相が強くなってきて、百貨店の中ではできなくなってなくなつたのです。こういう文化性が戦争前にはありました。

福井市は空襲、戦後3年目に福井震災で町中は全部焼けたのですが、84.8%が焼けた。これは日本で二番目くらいにひどい。ぼく、このまちづくりに参加しているうちに、あるひとつの地図を見つけたのです。これなのですが、順化小学校通学大絵図、どういふものかというところ、昭和9年に描かれたものです。順化小学校通学のあたりを描いたものです。松村しゅうぞうという人が描いたとあるのですが、市役所に聞いても分からなかった。だからぼくには謎の人物ですが、その松村さんがその人の思い出をこの図に書き込んでいるのです。

ここにヨーロッパ軒がある、福井唯一の洋食専門店。その下に、勝沢道具店、白髪のおんちゃんが有名。中アメリカヤス問屋、片町のマドンナとか。大久保せんざい、テーブルの代わりに大きな太鼓があった。とか。ここに描かれている思い出は空襲と地震で全て焼けてしまった。この図はひとりのひとが自分の記憶で描いたものなので、誤りがあるのですね。ぼくが福井にいた頃、その当時を知るひとが、ここはこうでもない、あれはこうだったと、そういうイベントをやっていました。

この絵はなかなか面白いのですよ。これって駅前ですが、「若い男女のデート場所(初級)」と書いてある。その上を行くと桜橋ですが、「若い男

女の密会場所(中級)」と書いてあるのです。(上級はどこかと探したのですが、それはなくて、ここに似たようなのがありました。「これから先、子どもはもちろん、大人になっても遊びに行つてはいけないと母は言った」とある。九十九橋のところですが、昔はここは赤線地帯でした。だから、町中の人はあそこに行つてはいかんよと子どもに教えていた。川辺のところにも面白い記述があるのですがこれは戦後のものです。「戦後のアベックの名所、足羽川とか右岸、ここまで来る娘はすべて問題だ」と書いてある。つまり、場所がどういふ場所だったかという思い出がすべて書いてある。

さらに、大事な地図だと思つたのは、この図の中に、この子かわいい、この子かわいい、といろいろ書いてあるのですが、唯一ここにハートマークがあつたのです。「あいちゃんの家、二級下の美少女、喻えようもないくらい美しい」と書いてある。ハートマークで囲まれている。この人はどんな人から分らないですが、他はきれいだ、かわいい、としか書いてありませんが、ここだけハートマークだったので、おそらく、初恋の人か当時付き合つていた人か、なにかがこのハートマークに込められているのではないかと感じたのです。この地図を一生懸命見るイベントをやつていたときに、市の人から、「せつかくこういうイベントをやつているのだから、ドキメンタリーの映像にしてくれませんか」と頼まれたのです。ぼくは、これはドキメンタリーではないような気がしたのです。地図の中に込められた思いはドキメンタリーではなくて、映画にした方がおもしろいではないの、ということ、「君がいた街で」という映画を撮つたのです。初めての映画でした。

地図を見ることで映画ができたのですが、逆に映画を見てくれることで戦前の空襲と震災で焼ける前の福井にみんながおもいを馳せてくれたら、ひとつの町の魅力が深まるのでないかと思つて作りました。

(映画の予告編を見る)

この話は町の人は一部しか知らない。外の人も当然知らない。でも、なにかに思いを生えることが魅力のひとつになるといふことの例ですね。

もうひとつの事例、夕張

もうひとつ事例を紹介したいと思います。これは、特に、地方に関わるときに大事なことなので、紹介したいと思います。ぼく、映画で夕張によく行くのですが、夕張の名前は夕張メロンで有名ですね。いま、夕張に行くときどういふ風景が見られるかというと、建物はあれど人はいない、がらんどうになっている、廃墟のような商店街が並んでいる、そういう風景が見られます。なぜかという、まず、夕張の人口を振り返つていたいと思います。

昭和35年、116,908人。昭和45年になると、74,162人。昭和55年になると42,483人。平成元年には24,440人。平成10年で16,211人で、平成27年は8,843人です。たぶん全国の中でもかなりひどい減り方をしている。北海道はこの10年間で4%ほど減つて

いるのですが、夕張を見てみるとこの10年くらいで30%の減少です。いまでも減り続けている。なぜこれだけ減っているかというと、夕張はメロインで有名ですが、その前は炭鉱だったのです。一番掘り易いところだったので、最後まで残った炭鉱のひとつだったのです。炭鉱でばんばんやってきた。なぜ減ってきたかというと、ひとつは炭鉱がなくなったから。これが一番の理由です。逆に言うと、炭鉱のためにどんだん人が来た時代もあったというのが夕張です。いま、夕張は財政再建団体になっています。財政再建団体というのは、簡単に言うと財政的に破綻した自治体です。自分ではもう借金を返すことができなくなったということで、破産というところで国の管理下でやっているのが財政再建団体です。それが10年続いています。当時の市長、この人は偉いひとで東京都の職員で夕張に派遣されていたかたで、夕張の現状を見てこれとても帰れないということ、東京都の職員を辞めて市長になったひとです。11万人の市長なら分かります、8,800人の市長ですからね。8,800人は村のレベルだと思っています。

ちよつと想像して欲しいのですが、自治体が財政破綻して再建団体になる、何が起これると思います？実際に起これたのはこういうことです。

人口は最盛期が110,000人、破綻時が13,000人。現在9,400人ですね。小学校は最盛期には22校ありました。破綻直前は6校、破綻したら1校になりました。中学校は最盛期9校あつて、破綻直前は3校、破綻したら1校になりました。市の職員ですが、263人から96人に減りました。数だけ出なくて給料もだいぶ下がりました。施設使用

料、それまであまりなかったのですが、破綻直前から現在、使用料が50%値上がりになりました。下水道の金額は破綻前が1,270円でしたが、現在は2,440円です。ゴミ処理はそれまでかかっていたのが2円。市長の給与は862,000円だったのが259,000円。職員の給料が平均15%削減。

これでひとつの議論があつて、破綻直前から破綻で4,000人減つたのですが、これは水道料金が上りますよ、ゴミは有料ですよと聞いて、それなら住まないわ、といって出ていた人がいっぱいいたからです。出ていった人たちは出て行ける人たちだったのです。残った人は出ていく余裕がなくて残らざるを得なくて残った人たちです。これは夕張の例ですが、今後日本各地で起これることで、余裕ある人は出ていく、そうでない人が残る、こういうことはこれから起これると思います。

いままでに話は夕張のネガティブな話でしたが、いまはどうなっているのということなんです、実は、夕張はすごく頑張っています。がんばるには理由があつて。夕張にはいま電車で行きますが、これも来年はなくなりません。そうですね、こんな荒野みたいな中をずーっと線路が続くわけにはいかないですね。炭鉱とか儲かるところだから線路が引かれていたのですから。

駅前の写真ですが、冬になると雪が積もり、ぼくが行ったときはマイナス13度でした。写真にあるように一番の中心街に「夕張本町キネマ街道」と名が付いています。ここに顔埋め看板がありまして、上に「黄色いハシカチ」。これはまた後で出します。

炭鉱町の特徴ですが、昭和36年、最盛期の時ですが、11万人の人口だった時ですが、映画館が17館ありました。石炭の山がそれぞれ別々にあつて、それぞれ山の集落毎に映画館があつたのです。なんでそんなに映画館があつたかという点、みんなが夕張で言っている言葉を聞くと分かるのですが、「夕張、くうバリ、坂ばかり、ドカンとくれば死ぬばかり」「くう」は空、そら、なにもないということ。「くうバリ」にはもうひとつ意味があつて、何もないとこだから食べることと飲むことしかないで。夕張は炭鉱町なので、坂ばかり。次は炭鉱の悲しさですね、ドカンとくれば死ぬばかり。いつ死ぬか分からない。給料はいいから流れ者達がそこにやってきて、いつ死ぬか分からないところで生活する。お金があつたら映画館行こう、それで17館もあつた映画館が満杯だった。

夕張は「幸せの黄色いハンカチ」の舞台でした。

(「幸せの黄色いハンカチ」のさわりを見る)

高倉健さんの名作のひとつですね。当時、ふるさと創世一億円とありましたね。あのとき夕張はなにをしたかという点、もう石炭はダメだめだと分かつていたので、「石炭から観光へ」と、一億円を観光に使つた。ひとつは「石炭館」とか作つたり、もうひとつは映画の町ということ。「夕張国際映画祭」を始めた。一部の人の反対を受けながらも、それに故郷創生の資金を使った。それだけでなくて、東京の代理店を使って観光の誘致をします。

こういうCMもあつたのです。

(当時の夕張のCM)

東京の代理店になにかできないか、となると、こんなのはどうですか、このようなCMになる。バンバンやつたのです。こういうことをやつたあとに破綻したのです。

じゃ、いまの夕張どうなっていますかということなんですが、「夕張国際映画祭は一旦なくなりました。市が予算を使ってやつていたので10年近くやつていたのですね。夕張が財政再建団体なつたときに日本中でいわれたのが、あの映画の町どうなるのだろう、でした。日本の映画の人はすごく心配したのです。その結果、民間のひとが企業協賛ということ、市は関わらないということ、映画祭は復活しました。それは、「ゆうばり国際ファンタスティック映画」ということで、日本では大きめの映画祭です。夕張に來ると、マイナス13度ですから、映画に参加したひとはそこから逃げられないのですね。泊まるしかないから。また、居酒屋が2,3軒しかないから同じところで飲むしかないのです、俳優さん達と。だから來ている人は他の映画の人とすごく仲良しになります。世界的に人気のある映画祭になっています。

地元の人が何を一番楽しみにしているかという点、マイナスの外でバベキューパーティーをする、ストロブパーティーというのがあります。北海道文化なんですけれど、ジンギスカンを焼いたりする。その時來た人に、会費がいくらでなくて好きなだけ入れてくださいという。1,000円入れる人も10,000円入れる人もいます。その時余つた金を次の年

のストロブパーティーに使う。毎年毎年、地元のひとのおもてなしでそういうことをやっています。夕張と言えれば映画だねというイメージをみんな持っているの、この映画祭はずっと続いていくと思います。

皆さんに聞きたいのがこれです。

夕張はすごいお金を使って観光の映画祭をやってきた。いつてみれば、それが理由になつて町が破綻したのです。その時それは無駄だったのですか、という言い方をするかどうかなのです。一過性のイベントにお金を付けてどうするのかとよく言われるのですが、それは一過性だと思つたら一過性になる。でも、そこで生まれているものを大事にするのは大事なことです。

日本でも似たようなことはいっぱいあります。鉄道です。明治の頃、日本中に鉄道が生まれた。国鉄以外の私鉄は、当時そこでお金をもっているひとがこれは投資だと、バンバン鉄道を作りまくつた。似たようなところに線が走つてみたり、本当なら計画的に作るべきなのにバンバン引いたので、結果としていま廃線があちこちで起こっています。北海道ではヤバイくらい進んでいる。国鉄の一部はかつて私鉄が作った所を国鉄が買い取つたものなのです。民間の過剰投資が日本の国鉄を作りあげているところがありますね。いまは整備されています。じゃー、そのときに過剰投資してその時は損をしたけれど、そしてその時にすべて撤去していたら鉄道は残っていないけれど、残っているということは、実はそこにチャンスがあったりする。いま、アメリカはインターネット大国になっているけれど、それは最初に光ファイバーを引きすぎたから、そしてそのよう

な会社は採算があわずにつぶれていますけれど、そのあとでその光ファイバーを使つたら何ができるといふことで、いまはあれだけネット上で見ることができるようになったのですね。過剰な投資だったら、損した人はいますけれど、そこになにか残っているなにかをその町に活用できれば、実はすごく意味のあるものだったりする。

これまでの話で皆さまに聞いてみたいのは、観光客は知っているけれど地元の知らないもの、そのようなことがここにありますがということ。そういうことを考えてみて欲しい。名田庄のみんなは知っているけれど観光客の知らないものはなにかありますか。もうひとつ、昔豊かだった頃に重宝していま無駄になっているものはないですか。また、それがあんならその活用方法はありますか。観光の人たちが考えるのは、こういうことです。だから、いままでの観光とは違いますね。こういうのが観光の目指すところかなと思いますので、地域の皆さまが考えてくださればと思います。これで多くの話題提供はお終りにしたいと思います。ありがとうございます。ごうございました。

(拍手)

講演後の質疑応答

早川 どうもありがとうございます。今日の提案にたいして直ちに答えはないと思いますが、ここにいろいろ書かれていること、あるいはそれには囚われずに、いろいろ話合っていただけだと思います。なにかござ

いませんか。

なぜ外国からの観光客が増えたのか

早川 名田庄からずれるかも知れませんが、日本にたくさん外国人が来るといことですが、理由を挙げられていましたね、格安航空会社。あと理由があるかと聞いていたのですが、あれしかなかつたように思うのですが。そのほか何が大きな理由なのでしょう。

木川 一番分かりやすい例は、静岡空港なんですよ。作つた当時はなぜこんなところに空港をという話だったのですが、蓋を開けると外国人、特に中国人が異様に増えたのです。なぜかというところ、これまで飛んでこなかつた中国の地方空港から飛んできたのです。地方都市といつても中国の地方都市は百万人規模の都市です。静岡に空港があつたので来た。静岡に来たから静岡で遊ぶわけではないのです。日本に着くとレールパスで日本中の鉄道を安くで乗れる。そういう人たちが日本中を回つているのがひとつ。なぜ増えたかというところ、中国の人が豊かになり日本に来て日本の物価でものを買えるようになったことがあります。

ヨーロッパから人が来るようになったのは、ビジットジャパンとか向こうに日本を見せるプロモーションが盛んになったからです。

早川 あそこは特に魅力があるから行こう、というのでなくて、ともかく行こうと思つてやつてきているように思いますが。

木川 そうですね、みんないろんな国に行き始めたんですね。日本もか

つてそうだったと思います。1960年代、ハワイに行きたいからジャルパックを頼んだのか、海外に行きたいからジャルパックを頼んだのか、となるとたぶん後者ですよ。行つたことないから行つてみたいと。いま観光の人がいつているのは、この人たち次に来るときはそんな単純な理由でないよと。二回目来させるにはどうしたら良い？それがテーマになっています。爆買いの時代は終わりました。

夕張、限界集落

参加者 A 先ほどの夕張の話ですが、夕張映画祭は昔やっていてそれが10年ほど継続して、そこでなくなつたけれど、もう一度やりたいということとで全国から集まつて盛り上がつて、写真の中に大勢写つていましたが、あの人たちはそうやつてやつて来た人たちですね。

木川 そうですね、映画業界のひとたちはみんな夕張に行きたがりですね。俳優さんたちは、行くまでは全く面識がなくても、隣で飲んでいゝるわけですよ、向こうに行けば、喋つていゝうちに映画に出るといゝ話も出てきます。人と人との交流が良い。あれが札幌でやつていたらあゝはならないです。札幌ならいくらでも店があるから。夕張は二、三軒しか店がないからみんなそこに集まるのですよ。宿も二箇所しかないからみんなそこに泊まる。みんなが一時期隔絶されて夕張に集まる。映画の人たちは社会的に弱い人たちの味方になりたがる人たちなので、夕張といゝのが大変なのはみんな知つていゝる。だからこそ夕張のためになにかで

きないかなと思う人たちが集まっている。

参加者B 夕張の話が出ましたので、「こ存じだったらおしえてほしいのですが。というのは、人口が減つてくるとあつちにぼつりこつちにぼつりとなり、行政の効率は悪い。集落を集めるとそれがいくぶん解消されると思うのですが、長年住んでいるところから離れることになるんで、夕張ではどういう現状なのか。こ存じだったら教えてください。

木川 夕張の場合はそのあたりに関しては比較的難しくないとおもいます。というのは、もともとの集落、このあたりにあるようなもともとの集落と炭鉱町とは違うのです。夕張映画祭ですが、炭鉱町のところにするさと創世一億を入れたので、もともとの夕張の人たちから大反発を受けたのです。こつちの方はメロン農家の人たちで、いまやばくなつていのはもともと炭鉱町のところ、そこは炭鉱がなくなつたのでみんな出てきました。それで、作っているのは市営住宅のようなもので、元から土地を持つておるようなところでない、行政としてはやりやすい。ぽつとできた町なので、ぽつと縮小するのはできますね。

しかし、さつきおつしやつた限界集落の場合は、それらを縮小する方向で法律は整備されていますが、水面下では。ただ、住んでいるところを出ていってそこを田圃にしますというのは、たぶん、できないでしょうね。一回あつたのは、山形かどごかの町で、とりあえず冬の間だけ下に下りてくれという依頼がでた。そこまで除雪をやるのは不可能から、下に下りてくれ、市営住宅を用意しているからと。これは冬場だけの話ですが、通年、そうしてくれという話は今後出てくるのではないかと思います。

ぼくのまわりの研究者の間で、町がなくなるといふのはどういふ感覚なのか調査に行つていて、山口県では、人が住まなくなった建物を市が寄贈を受けるといふ形にしてそこを全部公園にしていくといふことをやっていますね。

インバウンド

参加者C インバウンドの話が出ましたが、日本中インバウンド・インバウンドと言つていますが、この地区にとつてそれが本当に最適なことなのか、外国人にここを見せてどんだん来てもらうこと、それは本当に良いことなのか、よく分からないところがあります。これが第一点でそれに関連して、先ほどでていましたグリーンツーリズムとかエコツーリズムとか、いまそれに加えて教育ツーリズムとか、福井の方でもこれらに関する団体を設立するための総会をするとか新聞に出ていましたが、これらも大きく括ると観光業になるということでしょうか。

木川 まず始めのインバウンドですが、どういう人が来ると想像されますか？ 例えば、名田庄にどんな外国人が来て楽しむだろうと。ぼくは、あり得ると考えるのは、京都から抜ける鯖街道を自転車で走るイメージですね。白浜でも車で来たあと、積んできた自転車で走るのを見ます。ドイツ人はそういうイメージです。あとは、この名田庄でいえば、安倍晴明にゆかりの地ということで、文化的な興味を持つてフランス人のバックパッカーたちはそういうところを見に来る可能性があります。だか

ら、爆買いに来る人たちだけがインバウンドでなく、こういうひとが来てくれたら良いなということ想像しながら、100人も200人も受け入れられないじゃないですか。10人か20人程度で、いままでと違うものを見たいと思う人がどんどん増えてくる時代だと思います。

インバウンドって来ますか、というと、来るのです。和歌山もいま大変な量なのは、熊野古道なのです。20年前に熊野古道に外国人が来るなんて誰も想像していなかったと思うのです。熊野古道は世界でふたつしかない世界遺産の巡礼路なんです。ひとつはスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路、寺院に向けて何100キロも聖人が歩いた道で、そこを同じように歩く人がいます。日本の和歌山にも来るのです。そのとき何が問題になったかというと、熊野古道の山の中にある旅館はネット予約を取れるサイトがないのです。電話して「今日空いていますか」という昔ながらの旅館だったのです。それで、とあるコンベンションビュローがそれをすべて業務としてやることになった。つまり、世界中から予約できるところになった。カード決済もそこできるようになった。それで収益事業も挙げられるようになり、「熊野古道」はもともとルートのマップに日本語でしか書いてなかったのが、外国人は「熊野古道」という文字は分かるんですが、「こゝ」は熊野古道ではありません」と書いてあったりして、それで全部英語に直して、そして来てもらっても大丈夫ですよと、誘致しています。

熊野古道のようなどころに来てる外国人はショッピングに来ている外国人ではないのです。日本文化とか、いままで見たことのないなにかとか、

そういうものを求めてきている人なので、いっぱい来たら迷惑になるなというような外国人ではないのです。そういう人たちが来たらこの町にかよくなるなと思って整備していくことは、すごく大事なことです。

DMO

最近、DMOという言葉があまりまして、多分役所の中では、DMOをやれとかDMO研究会とかあるのではないかと思います。これは、いままでなら観光協会と漁業組合は無関係ですね、でも船に乗って魚を捕る体験をしてみたいというような場合、これまでは観光とは思われていなかったのですが、グリーンツーリズムの場合もそうですが、観光協会はあまり相手にしなかった。それら全体を見られる団体を作りましょうというのがDMOです。(注：観光物件、自然、食、芸術・芸能、風習、風俗など当該地域にある観光資源に精通し、地域と協同して観光地域作りを行う法人のこと)

例えば、嶺南DMOを作ったならば、そこでグリーンツーリズムをやりたいならば、ここにこういうひとや団体がありますと紹介してトータルにやっけて行く。しかし、いまは、おっしゃるとおり、まだ分離しているんですね。体験農家、民宿農家ですが、福井はどういう方向に行くか分かりませんが、多分、いま日本で一番民宿と修学旅行を組み合わせて頑張っているのは南九州です。鹿児島、宮崎、熊本、三県では、かなりの数の農家が小学生や中学生を受け入れて泊めることのできる資格を取っ

ています。そうすると、県のほうも、これだけ受け入れ先があるのが分かつてるので、それをもって修学旅行の誘致に行くのですね。

もうひとつ、最近多いのは、夏休みに大学生を何校からか集めて学習することをやる。これは長野県とか、いろんなところから見たら近いところにあるので、いま地方が持っている問題を学生たちに体験してもらおうツアーです。大学としても、学生たちになにか体験してほしいと思ってもそのプログラムがないときなどとても良いのです。長野県の飯田市には大学がひとつもないのですが、飯田から出て行った大学生が飯田に戻ってそのようなことをやってみたいと思うようになる。Uターンを促進する点からも意味があることです。

ささやかな山の中、地域の中で何をどうやったら良いのか

参加者D 先生のいままでの話はわたくしには一から最後まで皆分かることばかりで、本当にその通りだと思えます。わたしたちは子どもの頃から山に木を植えて田圃を作って、この村は大金持ちになると思ってたんですけど、百姓は一人ずつ止めていくわ、山の木は金を出せば買ってくれるというような状況になりました。住んでいるところで金儲けができなければ、子ども達はどうしても出て行ってしまう。小手先のようなことをやってみても、所詮、1年か2年でほとんどお客さんが来なくなる。私の体験の中から感じることです。側から見れば努力が足りないということはあるのかも知れませんが、資金の面からなかなかうまく行

きません。

この地域の人口は、かつて昭和30年代は4800人ほどでしたが、いまは3000人以下になっています。子どもは集落に何十人もいたのが3人か4人の状況なので、なんか迫力に欠けてしまう。みんな何にも手が出せないというのが現状です。こういうささやかな山の中、地域の中で何をどうやったら良いのかということについて、もしもヒントがあつたら教えてほしいと思います。

木川 これ、どこもなかなか大変で厳しいところがあるのですが、ただ、昔から一度も豊かになつたことのない場所であつたなら、これからなにか新しいことを作るのには厳しいと思いますが、少なくとも名田庄は林業やなにかで最盛期があつたということが大事だと思うのですよ。最盛期があつたということは、そこになにかのヒントがあるのだろうと思います。人事みたいな言い方になってしましますが、たとえば、名田庄と言ったときに、「名田庄、いいね」というひとが関西にはけっこういるのです。なにがいいねとは聞いていないのですが、少なくともそういうふう言われるなにかとは、次の手を打つチャンスはなにかあると思います。木材、これは売るのがしんどいことになっているのですね。森の中に入ること、たとえば、トレッキングツアーなど成り立つと思うので、軽トラしか通れないが滋賀県に抜ける峠道があると今日聞いたのですが、それなど歩いてみたい気がします。いま、ぼくは歩いてみたいと言いましたが、これが100人200人となれば産業になるのかもしれない。ここで取れる山芋が他のところとなにか違うとか、そのなにかは自分たちにとっては当たり前

かも知れないが、ほかから違うよと言われた時に、それがチャンスとなって、「名田庄山芋」と名前を付けてブランド化していくとか。お金をかけなくてもできる」ことがまだまだあるように思います。

参加者 D はい、ありがとうございます。いまおっしゃた自然薯なんですが、いま名田庄の特産品として、ようやく、これも30年になります、根付いてしま頑張っています。残念ながら後継者が、あのしんどい仕事はなあと言われていますが、定年退職者がなにかしてみようかなという人がいますので、そういうひとたちを相手になんとかひとつまた、名田庄にはこういう特産品があるのだということを示していきたいと思っています。

古民家を利用したキャンプ場

参加者 A いまの話に関連して、ぼく、20代の後半で大阪から帰ったときに、いま話された勇にいさんと呼んでいるのですが、古民家を利用して宿泊施設をやっておられたのです。こんなところキャンプ地になるのかと思いましたが、先生にお聞きしたいのは、集落全体をそのまま形でキャンプ場として30年以上続けておられるので……。

参加者 D このキャンプ場というのは、もともと村が集落整備というところで、いろんな僻地がいっぱいあって、さつき先生が言われたように、そういうのを合理的にやるのには便利の良いところに全部集めて、当時、10軒とか3軒とか5軒とか、そういうのがいっぱいあったのですが、そういう

のが便利の良いところに出てきたのです。ところが、私の集落の場合は京都府に近かったもので、川に魚釣りや鮎釣りに来ていた人がいたので、魚釣りがひとつのヒントになるのではないかと思いい、その集落だけは民家を残したのです。そうしたら、ちよつと泊めてくれないかというひとがあったもので、そのうちキャンプ場みたいなものになり現在もあるのです。町の方もせつかくやるのなら水洗トイレなども整備しなければと、いろんなことをやりながら、いまもやっているのです。なかなか、かつてのバブル時代のようないでは来てくれなくなつて、それにはなにか努力が足りないのかなと、話を聞きながら思ったりしていたのですが、昔、囲炉裏にあたって節分になるとガヤの葉を飛ばして、子ども達といつしよに、葉がはじいたら何月は雷だ、何月は嵐だと、そんなことをしながらひと冬過したりしていたので、そういうことを都会から呼んできた子どもとやったらいいなと思いついていますが、なかなか長続きがしないもので、それから、さつきおっしゃったように、わたし達でないと食べられないものはいっぱいあるんですよ。でも、保健所あたりが、そんなものを食べさせてもいいのかがあったら営業停止になるぞ、というようなことはあります。もうひとつ、谷川の水、これは完璧な湧き水なのですが、「この水はおいしいですよ」と看板を立てると、誰の許可を取つてやったのだ!とこれも営業停止だ。いろんな壁があつてなかなか思うようにいかないんですよ。

木川 それは全国的にもあつて大きな問題です。同じような話ですが、漁協さんが困っている問題があります。漁協さんは魚を捕るのが仕事で

あつて観光客は来てくれないほうが良いというのがありますね。地域内で対立のあるのは確かなのですが、なぜ観光客が日本に来るようになったかという点、もし経済が右肩上がりなら、観光と言わなくてもすんでいたのです。2003年に観光を言い出したのは、このままでは経済がだめになっていきますよ、地方には誰も住まなくなつて、それでは困るでしょうという点だった。そういうことを理解した上で動く団体が、DMOであつたりして、もし名田庄DMOがあれば、たとえば、「この水はおいしいですよ」と看板を立てて、それに、誰の許可を取つてやつたのだ！と怒る人があつた場合、これは地域のため、みんなのためになることですよと音頭を取れる、そういう形が必要だと思います。一人でやつていたらしんどいし、なかなかうまくいかない。みんな協力して、この町どうしていいかとやらないと。その枠組をどう作るかだと思つています。

本物志向

参加者 A インバウンドのお客さんということで、海外からたくさん来ておられるということですが、その人達は日本の食事であるお米を積極的に食べておられるのですか。

木川 ちよつと前の話ですが、中国人の方々が日本に来て買い物に行く、爆買いですね、あのとき、中国人の方が中国人に欺されながら、来ていることがけつこうあるんですね。関西でもいくつかあつたのですが、中国人だけが連れて行かれる買い物場があるのです。そこで売っているのは質

の悪い物ばかりで、ツアー旅行で買って帰るといふことがありました。それから、和歌山から大阪にかけての街道につぶれかけのラブホテルがあつて、中国人団体がそこに泊まる、安くあげるためですね。日本に来て、米はさすがに日本の米を食べていると思いますが、野菜は中国産であつたり、それが観光というものの負の側面です。それがやはり最初ですね。しかし、そこから一步入つていったら、これを知りたいという本物志向は、どこの米でなければいけないとかになります。

京都には一泊20万のところがあるのです。町屋で。そういうところにけつこう外国人は泊まるのです。一つの建物が一晚20万です。そういう人たちは京都の本当の町屋に泊まりたいから20万払うのです。これを食べたいという人達はそれに金をかけることに躊躇しないのです。和歌山のとある川ではカヌー下りをすごいスペシャルプライスでやつていまして、一泊二日で20万くらい、それは一日ひと組限定です。一人カヌーで下るのに10人くらいのメンバーがついているカヌー下りなのです。そういうこともあるのです。

沖縄県が観光の部分で頭打ちだと言われているのは、あまりにも観光が開発されすぎて、ちよつと高い目のホテルが平均的にあつて特別ななにかがないのです。一泊20万なり30万払つても特別ななにかがあれば、それも含めて層の厚さが広がっていくのです。例えば、名田庄に一泊百万出すから本当のなにかを見せてくれ、といつて富豪が来たときに大事なのでですね。

田舎にやってくる

参加者D 今度、東京の中学生が研修で、川とか炭焼きとか、そういうところに来てくれるのですが、はたして喜ぶのかがっかりするのか、いろんなものがあるなかでの作業ですので、是非とも有意義なものであつて欲しいなと思っています。そういうことを今後、さあ、それを本格的にやるとなると、よほどいいアドバイザーなり教えてくれる人がいないと難しいです。

木川 そこらへんもリスクを分散しながらみんなで考えながらやって行かないとあかんところがありませんね。

早川 我が家に自転車でこのあたりを回る外国人の人を何度も泊めたことがあるのですが、それはイタリアに住んでる友人が企画したエコーツアーで、インターネットでそれを見て集まった人達だったのですが、京都が出发点で美山町経由で五波峠を越えて名田庄までやつてきたのです。そのあと小浜に行きましたが。一番多いときは13名でした。みんなに布団を敷いて、田舎の家ですから戸やふすまを外すと家じゅう一つの部屋になる。田の字型の部屋ですね。「これはずいぶん柔軟性のある家だ」と喜んでいました(笑)。いちばん喜んだ食べ物は、焼き鯖にショウガ醤油。こんなうまい物はないと(笑)。風呂を家で入れるのは大変だったの、「ご湯つくり」に連れて行ったのですが、イギリスの人がとても気に入って、「国に帰ったら絶対このような風呂を作る」と言っていました(笑)。また、入るとき、こちらはいつものようにかけ湯だして入ったら、「おまえの入

り方は間違っている、もつとちゃんと洗ってから入らなければならぬ」と言われた。日本に旅行する前に入り方を教えてもらおうようです。

木川 ほかのところと違って名田庄ですから、すでにブランド化されていますね。それを活用した上でのものというのはいっぱいあると思います。長野県にあるスキー場ですが、夏は使わないのでほったらかしてあったのですが、あるときリフトで上がつてそこから見た星空があまりにもきれいだつたので、「日本で一番星のきれいな村だ」と言つて星で売っている。いまはスキーよりも。それは仕掛け人がいるのですよ。だれがいるかという、地元の人もいただろうし、リフトを残すと決めた会社の人がいただろうし、全国につながるJTBの人も関わつていて。

いま、日本を売りたいがつている、悪い意味でなくて、人はいます。その人達つて、それを見つけるのに限界があるのですね。ある程度まで、これは面白いなとこちら側で頑張つておかないと乗つてこないということはあります。

参加者D 中国の方で、あなたのところで夏場一万人くらい受け入れてくれますか、と言つてきたのですが、200人が精一杯なのに(笑)。結局そういうことなのですね。需要があつても受け入れ態勢がない。それが田舎の残念なところなので。少人数でも長く続く、どの民家でも泊まれるという、そういうことに関するアドヴァイスをしてもらえないかなと。

木川 全国のいろんな大学でいまフィールドワークとか町中でなにかやるとかにすごく積極的に、授業の単位になることもあり、例えば、ぼくがこちらの誰かに電話して「すみません、今年の夏3日間50人を体験さ

せてやりたいのですが」と言ったとき、相談できる人がいますか、ということですね。ああ、50人ですか、それならできます、というのならそれは成り立つし、できなければどこかに行ってしまうということですね。だから、来る・来ないから用意するのではなくて、来ることを想定して用意しておく。いまのように情報の早い世の中では行くと聞いてから準備するのでは遅いですね。

ロケツーリズム、フィルムコミッション

参加者E ロケツーリズムのことですが、その可能性と問題点について教えてください。

木川 優秀なところが二つあります。新潟と熱海です。どちらも東京に近いという利点はあるにはありますが、熱海の場合は分かりやすく、「EDさんいらっしやい」というキャンペーンをはっています。なにかというと、東京の人がこういうのを撮りたいという電話を入れると、二日三日うちに必ず返信があるのです。東京で撮りにくいものは何でも熱海なら撮れるなどとなっているので、東京のスタッフはみんな熱海で撮るので、いろんな手続き、許可を伴うことなど、すべてやってくれるのです。これは撮影隊としてはとてもありがたいですね。現地に行つてからそれらをするのは本当にしんどいのですよ、道路を占有するための許可とか、顔を写っているときは全部の人から承諾を貰うとか、そういうことはテレビ局にとって本当にしんどいことなのです。もうひとつは、今度行くか

らエキストラ何名お願いしますという熱海なんかはばんばんやってくれます。熱海の場合は役所の人にカリスマ的な人がいてうまくいっているのですが、その人が部署が変わればどうなるか、すたれるとおもうのですが、新潟の場合はフィルムコミッションが外にある。役所のなかにあるけれど会長が民間の人なのです。新潟は来るのを待つのでなくて、積極的に映画を呼びに行っています。「ちはやふる」という映画がありましたね、福井が舞台の。「チーダンス」もありましたね、あれも新潟で撮っているのです。映画を作りたいという人達がボランティアチームを作っていてそれが各地域にあつて、いちばん上に「新潟県フィルムコミッション」があり、下部組織がしっかりしているのです。来年はこんなのを呼ぼうとか、積極的にやっていますから、東京の人達は、新潟でやれば良いという発想が常にあるので。だから関西の人が福井に行つて撮ろうと思つても、福井のフィルムコミッションの人は乗り気でないですね。来るのを待っているがほとんどで、うしろにメディアがついてなければできないのが現状ですが、本当はそれに関係なくできなければ。

それから、なぜフィルムコミッションをするかということもみんなが理解してくれて協力態勢があるかどうか大きいです。芸能人に会いたい、ではだめなのです。そういうことを通じて町の魅力を伝えたい。しかし、新潟は、他のところと違うのは、内容に口出ししないのです。福井が映画を誘致したことがあつて1,500万出資したのです。そのとき言ったことは、「ここここは撮ってくださいね」。条件がついているのですね。これは仕方ないとみんな割り切りますが、映画を撮る人間としては、自

分が良いと思うのを撮りたいですね。それを黙って認めるかどうか、それがフィルムコミッションに求められる要素です。例えば、撮る人が「この人にインタビューしたいです」と言ったとき、「いや、あの人のほうがいい人です」と口出しするかどうか。それが慣れているところかそうでないところかで差が出るところです。

過疎地に学生を

早川 ダークツーリズムですが、福島では人のいなくなったところを見せるとか、そういうことがあるようですが、「ダーク」という意味では、過疎地、過疎地もある意味でダークなので(笑)、その過疎地に学生を連れてきてこんなところだというのは、どうでしょうか。

木川 実は内の大学けっこう行っているのです。それに学生にはけっこう人気があつて、五箇山、観光地でないほうの五箇山、あそこは「過疎地」とは言えないかも知れませんが、あそこは毎年行っています。岩手県の農家に50人ほど行って農家の仕事を手伝う代わりに泊めてもらう。そういうのを学校で募集をかけるとあつという間に埋まります。だから、ここでも、「限界集落を体験しようツアー」で募集したら、二、三〇人はあつという間に埋まりますね。みんな行きたいと思つているから。ただ、ぼくらとしては、行くときにどういふふうにして行けばいいのか分からないから、二の足を踏んでいるだけです。みんなは見たいと思つています。早川 それは二、三日のレベルの話ですか。

木川 いや、長くても良いのですが学校の授業にかからなければということです。

名田庄とDMO

参加者F 地元の観光協会で仕事をしています。名田庄出身です。DMOの話をもつと聞きたかったのですが、県の観光協会で聞いたのはDMOはまだ始まったばかりだということでしたが、名田庄でそれをやろうとするかどうかというふうにしていたら良いのか、わたしにははつきりと思えていないのです。もうひとつお聞きしたいのは、全然違う話なのですが、名田庄の星が売れないかという話がでていまして、先生から見てどう思われるのか、その二つです。

木川 名田庄は絶対売れると思います。社交辞令で言っているのではなくて、だって安倍晴明があるじゃありませんか。天文と関係がない町じゃないので、天文と含めてそちらに持つて行った場合、名田庄はこの関西の内では最も可能性のある町のひとつだと思います。そのためには、観光というのは勝手に作ったストーリーでやるものではなくて、地域のなかに基づいたストーリーに立脚していくということを考えたときに、ここにはこういう歴史があるとか、そういうなにかを見いだしたときに、それを祭りに繋げていったり、地域のなかに溶け込ませていったり、そういうのが見えて来たら大きな観光資源になります。成功事例があるからまねしたらアカンのでなくて成功事例があるから次やりやすいので、内

緒にするのでなくて、その成功事例を見ながらやれば良い。観光業界はうちよりそっちが良いとはできるだけ言わない業界なのです。向こうも良いし、こっちも良いと。向こうも良いからこっちも見たくなくなるでしょう、という発想で良いと思います。

DMOですが、いろいろ関わっているところがあり、いま、白浜と甲賀市のDMOに関わっています。問題は既存の観光協会とどう違うかということなんですよ。ショッキングな話をします。日本の観光協会ってありますね、これ、海外でどう訳されるかというと、DMOって訳されるので研究されていて、それを日本に取り入れて日本版DMOを作ろうとしているのですが、それはなにかというと、これまで観光に関わっていなかった人達がじつは観光になっているということです。昔だったらここまで生活の場、こっちから先は観光と明確なラインがあつたのですが、これがなくなつたのですよ。なくなつたこの状態の時に、いままでの観光のなかに閉じた観光協会でいいのか、枠がなくなつた上で他の分野とも連携をしながらやっていくかというのがDMOです。日本でいえば、観光協会が運営のコアになりながら、他の、たとえば農協とか、そういうのをまとめてその上の組織をつくらうというのがメインの形になってきています。そのほか、いままでなかったこととしては、なにかを見えるようにしましょうという事です。なにかというと、どこに何人観光客が来ていてどういう行動をしてどこでどれくらいお金を落としていったか、そういうことをDMOを通して見えるようにしましょう。それがなかったら 対策

なんて打てないでしょう、というのがもとの発想なのです。だから、DMOをやつて行くには、ひとり統計ができる職員を置かなければならないというのがあります。そこが、名田庄だけでやるとなると絶対できないと思うので、広域になると思います。

おい町、原子力発電所

参加者 A おおい町には原子力発電所があり関西電力がいつしようけんめい電気を作っていますが、3・11以降、いかに安全に電気を作っているか見てほしがっていると思うのです。ぼくはそこで直接働いているのではなく、そこに行く人を案内している側で、そういうことを感じるのですが、すごいなと思います。調査するだけで何十億かけているし。安全に尽くしている職員の熱心さとか。ああいうのは地域のなにかと合体させてなにかできないですかね。

木川 なかなか難しい質問です。以前いた福井工業大学の原子力学科の学生たちに、ある教育プログラムでお金がおちているのです。それはなにかというと、いま原子力工学科の学生が担う使命の一つとして廃炉があります。廃炉はとても重要な技術でこの先だれかがやらなければならぬことです。そういうことをやっている学生たちにたいして、廃炉+観光学ということと呼ばれて行っています。学生は3・11以降に大卒に入ってきた子たちですから、原子力を専攻していることで社会から悪い目で見られていることをじゅうじゅう理解しています。社会ではこれ

は誤解されていることだということも学びながら理解している。

でもその一方でおい町に原発があり、そのおい町の魅力はなんですかといったときに、彼らは興味がなかったのです。それで、ぼくは町全体の魅力を考えてやってみたらどうですか、と行って授業をやっているのです。例えば、夕張で「石炭から観光へ」といって観光に行ったけれどその分野の知識がなくて厳しかった。

それから、日本中の人が原発を偏見なしで見るといって、これは空気のなかでできあがっていて、それをぼくが「原発を見に行きましょう、ツアーしましょう、安全を確認しましょう」と言った途端、ぼくはなにかどこからかややお金を買っているのではないか(笑)、という勝手なイメージを付けられてしまう。ぼくとしては、最初にお話したように、この福井県のいやな誤解のされかたは悲しかった。福井の人はそれで潤っているとか、それで儲かっているとか、そういう発想だけで日本は原発を見ているのかも知れない。ぼくはそうじゃないと思うのですね。たとえば、40年前50年前に、そのときこのあたりがどのような経済状態だったのか分からないですが、このままではこの町は生きていけないと思つたときに、受け入れるか受け入れないか住民たちは話をして決めたのではないか。それは儲かる・儲からないではなくて、日本全体のために受け入れなければいけない、それがここだと。日本のためだというのが、多分、あるはずです。その思いというものは意外と外の人は知らない。共存してきたことをもつともつと知って欲しいという思いがあります。

ぼく、毎年一回福島に行き、そこで魚とお酒をいただくことにしてい

るのですよ。そこで出てくる日常はぼくにとつてすごく意味がある。韓国人の友人、研究者仲間ですが、彼らはびっくりするのです、なぜそういうところに行くのかと。それは、日本以上に海外には情報が届いていないのです。異様な状態になっています。その異様な状態になっていることにたいして教育の意味があると思っています。教育プログラムとして限界集落を見るとか原子力発電所と共存しているところに行つて話を聞くとかという教育プログラムは作っても良いと思います。でもそれをやっても原発に反対している人達とは共通の場を持つて話合う、というようなことはおよそ不可能です。通じない人に言うよりは通じる人たちとどうしたらよいかを語り合うような場所はあつても良いのかなと。答えになつているかどうか分からないですが。

参加者 A 誘致したときに頑張つた議員さんたちの気持ちは伝わっていないと思いますわ。

早川 まだ話尽きないと思いますが、時間が来ましたのでこれで閉会といたします。どうも長いことありがとうございました。
(拍手)。

一・参加者(17名)

池野弘一、井尻雅巳、板谷善次、今川直樹、木戸口武夫、小西勇

清水義信、辻徹、中野英二、鳴戸卓雄、早川博信、早川眞理子

細川正博、村上正純、森本真弘、森脇亜津沙、弥永雅代

二・発言者(2名)

A(60代、男性)

B(60代、男性)

C(40代、男性)

D(70代、男性)

E(50代、男性)

F(30代、女性)